

## フランス語教育報告

# フランス語文法の能動的な学習のために

穴埋め式教科書を用いた教育実践<sup>1</sup>

田中琢三・中里まき子

### 0. はじめに

語学教師は、授業において文法を教えるとき、学生の能動的な学びを促すために何らかの方策を考える必要があるのではないだろうか。というのも、会話を教えるときは、実践的な練習を通して比較的容易に学生を授業に参加させることができるが、文法事項の説明のときは、学生は教師の解説を聞くだけという受動的な姿勢になり、しばしば教師による一方的な授業になってしまうからである。さらに、多くの文法教科書には学生が授業で学ぶべき内容がすでに記述されているので、教師は教科書の説明を補足しながら、大筋では書かれている内容を繰り返すことになる。従って、教師の説明は付け足しにすぎなくなり、授業から何かを学ぼうとする学生の意欲が希薄になるという側面がある。

それでは、文法を教えるときに、会話のレッスンのように学生が能動的に参加できる双方向的な授業にするためにはどのようにすればよいのだろうか。もちろん、教師自身がスキルを高め、授業の進め方を工夫することが不可欠であるが、他方では、学生が意欲的な姿勢で学ぶことができるような教材を考えていくことも必要であろう。こうした能動的な文法学習という観点から、筆者は試行錯誤しながら穴埋め形式のフランス語文法教科書を作成し、2009年度から複数の大学の初級レベルの授業で使用してきた<sup>2</sup>。本稿では、まず、具体例を挙げながら穴埋め式教科書の特徴とねらいを紹介する。そして、本

---

<sup>1</sup> 本稿は2009年12月6日に獨協大学で行われた、第23回獨協大学フランス語教授法研究会におけるワークショップ「文法教科書の可能性——文法を効果的に教えるために」（発表者：田中琢三、中里まき子、アレクサンドル・グラ）をもとにしており、田中と中里が担当した前半の内容を発展させたものである。

<sup>2</sup> 田中琢三・中里まき子『A vous de jouer——穴埋め式フランス語文法学習帳』、駿河台出版社、2009年。

教科書で実際に文法を学んだ学生へのアンケートをもとに、その意図が実践においてどのくらい実現されているのかを探りながら、穴埋め形式の利点や問題点を検討したい。

## 1. 穴埋め式教科書の特徴

筆者が作成した文法教科書は、各課が見開き2ページによって構成され、左側のページに文法説明、右側のページに練習問題が配置されている。そして文法説明のところどころが、空欄、つまり穴になっており、学生が自らの手でこれらの空欄に文法事項やフランス語を書き込みながら、つまり穴埋めしながら文法を学ぶというスタイルになっている。後で具体例を挙げるが、穴を開けた箇所は、フランス語の初学者であっても、推理や類推によって正しい答えを導き出すことができるものが多い。こうした謎解きのような穴埋めのプロセスを通じて、学生が自ら考えながらフランス語の仕組みを効果的に学習できるように工夫されている。

他方で、学生は、授業で教師の解説を聞くことなしには穴埋め部分の正解が分からない。つまり、この教科書は文法教科書としては未完成であり、教師の説明を聞きながら学生が穴埋めするという、いわば両者による共同作業によってはじめて文法教科書として完成される。従って、この教科書を使用すると、教師の説明に対する学生の集中力が増し、さらに学生は文法を受動的に学ぶのではなく、学生自身が穴埋めのために考え、解答を自らの手で書き込むことになる。このようにして、学生の授業への参加が促されるのである。

以下では、具体例を挙げながら、穴埋め式教科書の特徴とねらいを紹介する。授業において重要なことは、教師はすぐに正解を示さず、できるだけ学生自身に考えさせる時間を設けることである。

〔例1〕主語人称代名詞

	単数		複数	
1 人称	私は	je	私たちは	nous
2 人称	君は	tu	君たちは	vous
3 人称	彼は	il	彼らは	_____
	彼女は	_____	彼女らは	elles

3人称を穴にしたのは、英語の **they** と異なり、フランス語では3人称複数形が **ils** と **elles** に分かれることが重要だからである。初学者がこのふたつの穴を埋めることはやや難しいが、教師が「彼女は」か「彼らは」のどちらかの穴を埋めて、学生にもう片方を類推させることは可能だろう。あるいは教師が3人称の部分を発音して、単数も複数も発音が同じということから綴りを推測させることができるかもしれない。

〔例2〕 所有形容詞

所有者	所有物		
	男性名詞・単数	女性名詞・単数	複数
je	mon	ma	mes
tu	ton	_____	_____
il / elle	son	_____	_____
nous	notre		nos
vous	votre		_____
ils / elles	leur		leurs

これは初学者でも類推しやすい例である。綴りから類推することができるが、それに加えて教師がそれぞれを発音することにより、学生に正しい綴りを考えさせることもできるだろう。なお発音から綴りを連想させる方法は、発音と綴りがほぼ規則的に対応するフランス語の学習では効果的であろう。

〔例3〕 動詞 **aller** の直説法現在

je	vais	nous	allons
tu	_____	vous	allez
il	va	ils	_____
elle	_____	elles	vont

この場合、**il** と **elle**、**ils** と **elles** は活用が同じなので類推できる。初学者が **tu** の活用を類推することは難しいが、教師が **avoir** の活用と似ていることを指摘する、あるいは活用を発音することによって学生にある程度考えさせることは可能である。

〔例4〕動詞 venir の直説法現在

je viens	nous venons
tu _____	vous venez
il vient	ils _____
elle _____	elles viennent

これも il と elle、ils と elles は活用が同じなので類推できる。また、教師が活用を発音し、je、tu、il、elle の活用が同じ発音であることを示すことによって綴りを推理させることができる。tu の活用を穴にしたのは、je と tu の活用が同じというパターンの動詞が存在することを印象づけるためでもある。

〔例5〕補語人称代名詞

① 直接目的補語となるもの

Pierre	me	cherche.	ピエールは	私	を探す。
	te			君	
	le			彼	
	_____			彼女	
	nous			私たち	
	_____			君たち	
	les			彼ら	
	_____			彼女ら	

② 間接目的補語となるもの

Marie	_____	parle.	マリーは	私	に話しかける。
	_____			君	
	lui			彼	
	_____			彼女	
	_____			私たち	
	_____			君たち	
	leur			彼ら	
	_____			彼女ら	

ここでは学生に正解を考えさせることよりも、むしろ学生に書かせることによって記憶させることがねらいである。①においては、英語と同様にフランス語でも「彼を」le と「彼女を」la は異なることを覚えさせるために「彼女を」を穴にした。さらに3人称複数の「彼らを」と「彼女らを」が同じles であることを印象づけるために「彼女らを」を穴にしている。②においては、「彼女に」を穴にしているが、これは直接目的補語ではかたちが異なっていたle とla が間接目的補語では同じlui になることを覚えさせるという目的がある。また「彼女らに」を穴にしたのは、①と同様に3人称複数の男女のかたちが同じであることを学生にはっきりと認識させるためである。

〔例6〕 代名動詞 **se coucher** の直説法現在

je me couche	nous _____ couchons
tu ___ couches	vous _____ couchez
il se couche	ils se couchent
elle ___ couche	elles _____ couchent

再帰代名詞の活用は、この段階ですでに習っている補語人称代名詞から学生に推測させる。3人称の再帰代名詞のseは、補語人称代名詞のかたちと異なるのでilやilsの活用は穴にしていない。

〔例7〕 動詞 **chanter** の直説法複合過去

j'ai chanté	nous _____
tu as chanté	vous _____
il _____	ils _____
elle _____	elles _____

これはすでに習っている avoir の活用を覚えていれば必ず書けるものであり、練習問題に近いといえる。

以上のように、学生に穴埋めさせる主なねらいは、類推や推理という作業を通して、フランス語独特の規則性、あるいは活用や綴りのパターンを学ばせることである。また、穴にした箇所のは多くは、特に覚えるべき重要な文法のポイントであり、学生が自らの手で書くことによって記憶や印象にとどめさせるというねらいがある。さらに、最後の例のように、穴埋めが練習問題あるいは復習という機能を兼ねている箇所も少なからず存在している。

## 2. 実践報告

学生の能動的な学習を目指してさまざまな工夫を凝らした文法教科書は、すでに複数刊行されている<sup>3</sup>。しかし、説明すべき文法事項を意図的にこれほど多く欠落させた教科書はこれまでになく、授業で本教科書を用いることはひとつの実験でもあった。そこで、筆者は2009年7月にアンケートを実施して、穴埋め式教科書に対する学生の反応を調査してみた。対象は、本教科書で約半年間フランス語を学んだ横浜国立大学と岩手大学の学生の計111人で、その大半が初学者の一年生である。以下はそのアンケートの質問の一部とその集計結果である。

① 文法説明のページが穴埋め形式になっていますが、そのために、教師の説明をよく聞くようになったと思いますか？

	人数	パーセント
1. そう思う	52人	47%
2. すこしそう思う	51人	46%
3. あまりそう思わない	8人	7%
4. まったくそう思わない	0人	0%

② 文法説明のページが穴埋め形式になっていますが、そのために、フランス語文法の規則性についてよく考えることができたと思いますか？

1. そう思う	45人	40%
2. すこしそう思う	54人	49%
3. あまりそう思わない	11人	10%
4. まったくそう思わない	1人	1%

③ 空欄（穴を埋める部分）の数についてどう思いますか？

1. もっと空欄が多いほうがいい	31人	28%
2. ちょうどいい	70人	63%
3. もっと空欄が少ないほうがいい	5人	5%
4. 空欄はないほうがいい	5人	5%

<sup>3</sup> 例えば、佐野敦至他『発見方式 —— 使えるフランス語』（朝日出版社、1998年）や、曾我祐典『ことばのしくみ —— フランス語（改訂版）』（白水社、1996年）など。

①の集計結果を見ると、穴埋め形式にすることによって学生を授業に集中させるという筆者のねらいは、ある程度は成功したといえるだろう。また、②の結果からわかるように、筆者の思惑通りに、大半の学生にとっては穴埋めの作業をすることが文法の規則性を考える契機になったようである。③の穴の数に関する質問の回答を見ると、先に具体例で示したような頻度で穴が空けられていても、学生の抵抗感はあまりなかったことがわかる。

アンケートでは、このような選択式の質問だけではなく、学生に本教科書についての意見や感想を自由に書いてもらった。そこでも全体としては好意的で肯定的な回答が得られたが、ここでは本教科書の問題点を抽出するために、批判的な回答をいくつか紹介したい。

まず、「文法部分の予習ができないのが残念だ」あるいは「予習希望者に穴が埋まったプリントを配ってほしかった」という意見があった。確かに、この教科書は文法教科書としては未完成の状態にあるために、初学者がこの教科書で予習することは難しい。ただし、他の文法書などを参考にすれば予習を行うことは可能であり、むしろそうすることによって学習効果が高まるかもしれない。しかし、予習をする学生が多くなると、学生が文法事項を知らないことを前提とする穴埋め形式を活かした授業ができなくなるというジレンマがある。

この意味では、穴埋め式教科書は、普段あまり予習をしないフランス語学習意欲の低い学生をあらかじめ想定しているといえる。実際、筆者は、近年指摘されている大学生の学力の低下や学習意欲の減退という状況に対応するために本教科書を考案したという背景があり、学ぶモチベーションが低い学生が授業で集中力を維持できるように穴埋め形式を採用したのである。いずれにせよ、本教科書がフランス語の学習に対して意欲的な学生に必ずしも対応できていないことは認めざるをえない。

ただし、予習の問題に関しては、あらかじめ辞書や参考書の使い方を学生に説明して、学生が予習する環境を整えたいと、学生自身に予習として穴埋めさせるというやり方が考えられる。あるいは、逆に、この教科書の特性を活かすために、あえて予習を禁止して、復習のための補助教材を増やすというのもひとつの方法である。しかし、どちらのやり方も一長一短があるので、現実的には双方を臨機応変に適用していくことになるだろう。

また、穴埋め式教科書に対する学生の意見として「穴埋めは休んだ時の勉強がしづらくなるのが不満」あるいは「先生の話聞き逃した時のために解答を付けてほしい」というものがあった。つまり、この未完成の教科書を使

うと、授業を休めない、先生の説明を聞き逃さない、といった制約が強化される。それ自体は、学生の出席率と集中力を高めるためには良いことであるし、その制約によって学生の質問が増えるというメリットもある。しかし、問題は穴埋めの解答がわからない個々の学生に対する対応である。われわれの実際の授業において、このような学生の声を聞いた時、個人的に解答を教えたり、自分で調べるように指示したりと対応はケース・バイ・ケースであった。毎回の授業で、あるいは何回かに一回の授業で解答を配付するというような方針を事前に定めておくことが必要になるかもしれない。

あるいは、「もう少し例文があるといい」や「もっと日常会話表現を学びたい」という学生の意見もあった。これは他の文法教科書に対しても学生が感じていることかもしれないが、対策としては、教師が教科書とは別の教材を用意するしかないであろうし、実際、筆者も補助的なプリントを適宜学生に配布しながら授業を行っている。しかし、本教科書を使用すると、他の文法教科書を用いた時に比べると、やはり穴埋め作業のために文法事項に多くの時間が費やされるという傾向があり、その分だけ日常表現の練習などの時間が減ってしまうことは否めない。

最後に、本教科書を授業で用いる教師の立場から注意すべき点を挙げておきたい。確かに、穴埋め形式を採用することで教師の説明に対する学生の注意力を高めることはできたが、その反面で、教師自身が穴埋めの方法に依存してしまい、穴埋めをすれば文法説明は終わりというようになりがちであった。また、この教科書では、最初から最後まで、学生に考えさせる装置としてもっぱら穴埋め形式だけを用いており、その結果、単調な授業になってしまうこともある。教師としては、穴埋めの作業はあくまで学習の入り口であるという認識を持つことが重要であり、穴埋め形式だけではなく、並び替えや選択式など多様な方法で学生を刺激しながら文法を説明していくことも必要であろう。

### 3. おわりに

近年、フランス語教育機関においてはコミュニケーション能力の向上を目指すいわゆる「コミュニケーション・アプローチ」の教授法を重視する傾向が強まっている。筆者の穴埋め式教科書は、ある意味ではこの傾向に逆行するものであるが、どうしても文法事項が疎かになってしまう「コミュニケーション」な教育の時代だからこそ、逆に時間をかけて文法の規則性を考えさせる



穴埋め式教科書のような教材が必要とされるのではないだろうか。また文法があらゆるコミュニケーションの基礎になることは強調しても強調しすぎることはないであろう。

また、本稿では文法説明の側面だけを取り上げたが、言うまでもなく、例文や練習問題を通じて文法に関する理解を深めさせることも大切である。そして、例文や練習問題には、文法事項の説明だけではカバーできないフランス語の諸相、例えば、日常的によく使用される熟語や慣用表現などを学ばせるという目的もあるが、アンケートの回答にもあったように、筆者の教科書はこの点が不十分であった。しかし、例文や練習問題の質や量が、文法教科書において非常に重要な要素であることは明白である。従って、どのような種類の例文が、あるいはどのような形式の練習問題が適切なのかを、学生に能動的な学習を促すという観点から考え直し、あくまで授業という実践の場における効果や学生の反応を重視しながら、絶えず教材を改善していくことが今後の課題になるであろう。